

< 翻 訳 >

叙事詩の宗教哲学

—Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (XXVII)¹—

茂木 秀 淳 信州大学教育学部社会科学教育講座

キーワード： 靈魂の色，ヴィシュヌ信仰，ヴリトラ殺し

[271章] (D.280章, C.10025-10097, K.285章)

ウシャナスは言った。

- (1) 虚空と共に²地表を³腕の範囲とする⁴、かの聖なる威光ある神に、友よ、私は敬礼する。
- (2) 無限の場所を⁵頭とするヴィシュヌ神のこの上なき偉大さを (māhātmyam) 私は汝に語るであろう、ダーナヴァ族の優れた者よ。

ビーシュマは言った。

- (3) 二人がこのように話している時、(二人の)疑問を断ち切るために、ダルマを本性とする偉大な聖者サナトクマーラが⁶やって来た。
- (4) かの雄牛のごとき聖者は、力強い悪魔、聖者ウシャナスに礼拝されて輝く座所にすわったのである、王よ。
- (5) この座った偉大な知者に、ウシャナスは言葉をかけた。「このすぐれたダーナヴァ族にヴィシュヌ神のこの上なき偉大さをお話し下さい。」

¹本稿は『叙事詩の宗教哲学— Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (XXVI)—』(信州大学教育学部研究紀要第119号 2007年3月 pp.113-124)に続くものである。略号などは前稿に準じ、本稿で用いる主なものは以下のとおりである。

- Hopkins[1902]: E.W. Hopkins, *Remarks on the Form of Numbers, the Method of Using them, and the Numerical Categories found in the Mahābhārata*, JAOS. vol.23, pp.109-155, 1902.
- Hopkins[1903]: E.W.Hopkins, *Epic Chronology*, JAOS. vol.24, pp.7-56, 1903.
- Bedekar[1968]: V.M.Bedekar, *The Doctrine of the Colours of Souls in the Mahābhārata: Its Characteristics and Implications*, Annals of the Bhandarkar Oriental Research Institute, vol.48-49, 1968, pp.329-338.

²sākāśaṃ Cp. sākāśaṃ, ākāśena śūnyapradeśena saha vartamānaṃ madhyamottaraṃ bhavanam / (「虚空と共に」とは、虚無の場所である虚空と共に存在する中間と上方の世界のことである)

³prthivītaṃ Cp. (reading prthivī talaṃ) talaṃ, pādatalam ity arthaḥ /

⁴P. bāhugocaram D., K.: bāhugocaraḥ

⁵anantaṃ ca sthānaṃ Cn. anantaṃ sthānaṃ mokṣaḥ / (「無限の場所」とは解脱である) Cp. anantaṃ ca sthānaṃ, brahmalokasvargasthānaṃ / (「無限の場所」とは、ブラフマンの世界と天界である) Cs. anantasya, ākāśasya sthānaṃ, sīmā / (「無限の」とは、虚空の、「場所」とは、境界である)

⁶sanatkumāro Cp. sanatkumāraḥ, nivṛtīdharmapravartayitā / śukrasya ādhikārikatvena bahirmukhatvāt tādrśaṃ saṃśayacchedanasāmārthyaṃ nastīti sūcitam / (サナトクマーラは停止のダルマを行う者である。インドラには、その支配者の故に、無関心であるから、そのような疑問を断つ能力は存在しないと言われている)

- (6) サナトクマーラは、それを聞いて、ヴィシュヌ神の偉大さに関する意義ある言葉を、思慮あるすぐれたダーナヴァ族に語った。
- (7) ダイトヤよ、ヴィシュヌ神のこの上なき偉大さ、そのすべてを聞くべし。一切の世界はヴィシュヌ神の中に存在している⁷と知るべし、敵を苦しめる者よ。
- (8) 長い腕をもつ者よ、この神が動くもの動かぬものからなる生き物の群を創造した⁸。この神が、時がたつと(生き物を)奪い去り、時がたつと、再び創造する。(生き物は)彼の中へと消滅し、そしてそこから生じるのである⁹。
- (9) この神には、布施者によっても¹⁰、苦行によっても、祭式によっても到達することができない。感官の抑制によってのみ (saṃyamenaiva) 到達することができるのである。
- (10) 外的そして内的な行為によっても、心落ち着き (manasi sthitah), 認識 (?buddhi) によって(靈魂を)汚れなきものにする者は、死後無限性を得るのである。(Cf.Bedekar [1968] p.331)
- (11) 金細工師が¹¹、自分で大変な努力を何度もして、銀を火の中で純化するように、(Cf.Bedekar [1968] p.331)
- (12) そのように、個我 (jīva) は、百回の誕生の間、わずかの努力によって、清められる。そして一回の誕生においてでさえ大きな努力をすれば清められるのである。(Cf.Bedekar [1968] p.331)
- (13) (人は)自分の手足から小さな埃を簡単に (līlayā) 拭うように、大変な努力を繰り返して、罪を除去しなければならない。(Cf.Bedekar [1968] p.331)
- (14) 胡麻と芥子の種は、小さな花輪によって香りをつけられても、自分の香りを失わない。微細なものもそれと同様に考えられるべし。(Cf.Bedekar [1968] p.332)
- (15) それは、たくさん花輪によって繰り返し香りをつけられると、花輪の香りに移るので、自分の香りを失う。(Cf.Bedekar [1968] p.332)
- (16) 同様に、執着ある者たちにおける性質と¹²結びついた罪も、百回誕生すれば、習慣より生じた (abhyāsajena) 努力と認識によって (buddhyā) 消滅する。(Cf.Bedekar [1968] p.332)

⁷sthitam Cp. sthitam, sṛṣṭeh pūrvam / (「存在している」とは、創造以前に、である)

⁸P.,D.: sṛjaty eṣa K. avaty eṣa

⁹P.,K. は三行詩, D. は二行詩。K. の句の順序は P. とは異なる (P.ab=K.cd, P.cd=K.ef, P.ef=K.ab)。

¹⁰P. dānavatā D. jñāvatā K. dānava te

¹¹hiranyakartā Cn. svarṇakārah /

¹²guṇair eva prasaṅgiṣu Cv. prasaṅgiṣu, prakṛṣṭabhadhagavatsaṅgavatsu / guṇaiḥ snehādiguṇaiḥ / (「執着ある者において」とは、すぐれた聖者に執着する者、「性質」とは、愛着などの性質である)

- (17) 人は、自らの行為によって色づけられ、また色づけられないのである¹³。(Cf. Bedekar [1968] p.332) ダーナヴァよ、人はどのようにして個々の行為に至るのか、それについて聞くべし。
- (18) そして、(人は)どのように活動し、どこに存在するのか、力強き者よ、それを汝に順次話すであろう。それをここで心を集中して聞くべし。
- (19) 無始無終にして吉祥な主ハリ・ナーラーヤナ、彼こそが¹⁴動くもの、動かぬものからなる生き物を創造したのである。(Cf. Hopkins, Epic Mythology, p.213.13; Nārāyaṇa と Kṛṣṇa の同一性)
- (20) 彼こそが、あらゆる生き物における滅と不滅であり¹⁵、十一の変異を本性として、世界を光によって¹⁶飲むのである。(Cf. Hopkins [Great Epic] pp.166,fn.1, 170.1, eleven modifications)
- (21) 彼の足は地と知るべし。頭は天であると¹⁷、腕は方位と、耳は虚空と(知るべし)、ダイティヤよ。
- (22) 太陽はその光からなり、その心 (manas) は月に住み、その認識 (buddhi) は常に知識の中にあり、その味覚は水において生じるのである¹⁸。
- (23) 彼の両眉の中間に星がある、ダーナヴァ族のすぐれた者よ。星宿の円環 (nakṣatracakra) は両眼によって(生じ)¹⁹、大地は両足の中にあるのである²⁰、ダーナヴァよ²¹。
- (24) ラジャス、タマス、サットヴァはナーラーヤナ神を本性とする²²と知るべし。彼は、もろもろの住期の顔であり²³、友よ、彼は (tat) 行為の結果である、と知られている。
- (25) そしてまた彼は、非行為の²⁴結果であり、最高にして揺るがぬ者である。ヴェーダ讃歌は彼の髪であり、聖なる音節は²⁵彼の言葉 (sarasvatī) である。

¹³P.,K.: karmaṇā svena raktāni viraktāni ca D. karmaṇā svanuraktāni viraktāni ca Ca. viraktānīti, sāmānyato jīvaparo napuṃsakanirdeśaḥ, bhūtānīty adhyāhāro vā / (「色づけられない」とは、個我を意図して中性形で示されている。あるいは「(色づけられない)存在 (bhūta)」と(中性形の語が)補われるべきである)

¹⁴P. sa vai sṛjati D.,K.: devaḥ sṛjati

¹⁵kṣaras cākṣara eva ca Cs. kṣarānśaḥ prakṛtiḥ, akṣānśaḥ paramātmā / (「滅」する部分は根本原質であり、「不滅」の部分は最高我である)

¹⁶raśmibhiḥ Cp. raśmibhiḥ, indriyavṛttibhiḥ / (「光によって」とは、感官の働きによって、という意味である)

¹⁷P.,K.: divam eva ca D. divam ity uta (D. は D 句にもある eva ca の繰り返しを避けたか)

¹⁸P.,K.: pravartate D. pratiṣṭhitaḥ

¹⁹P.,D.: netrābhyāṃ K. netraṃ ca N. netrābhyāṃ netraraśmibhir nirvṛttam iti śeṣaḥ / (「両眼によって」とは、眼光線によって生じたという意味である)

²⁰P.,D.: pādāyor bhūś ca K. āsyam agniṃ ca

²¹K. はこの後に次の一行を挿入している。

taṃ viśvabhūtaṃ viśvādiṃ paramaṃ vidhi ceśvaram /

²²nārāyaṇātmakam Cv. nārāyaṇātmakam, nārāyaṇena vyāptam / (ナーラーヤナ神を本性とするとは、ナーラーヤナ神によって遍満されているということである)

²³P.,K. mukhaṃ D. phalaṃ Cs. mukham, utpattisthānam / (「顔」とは、発生する場所である)

²⁴akarmaṇaḥ Cp. akarmaṇaḥ, jñānasya / (「非行為の」とは、知識の、という意味である)

²⁵akṣaram Ca.,Cn.,Cp.: akṣaram praṇavo (Ca.,Cp.: vedo vā) / (「聖なる音節」とは、聖音オウムである、あるいはヴェーダである)

- (26) 彼は多くの抛り所をもち、多くの顔をもち、ダルマとして心臓 (hr̥d) に住む。彼は最高のブラフマンであり、ダルマであり、苦行であり、有であり無である。
- (27) 彼は、天啓聖典・教義書・(ソーマを掬う)柄杓を持つ十六人の祭官であり、祭式である。彼は、父祖であり、ヴィシュヌ神であり²⁶、アシュヴィン双神であり、城砦の破壊者インドラ神である。
- (28) 彼は、ミトラであり、ヴァルナであり、ヤマでありそしてクペーラ (dhanada) である。これらは²⁷彼の個別の現われである (pr̥thagdarśanās)。そして(人々は)その単一性も知っている。この世界のすべては、単一の神の支配下にあると知るべし。(Cf.Gonda, Aspects of Early Viṣṇuism, p.110.6 Viṣṇu-Mitra)
- (29) これ (ayam 聖典?) は、多様に存在する彼の単一性を語っている²⁸。人が、知識によって²⁹(彼を)見ると、サットヴァが³⁰輝き出るのである、ダイトヤのすぐれた者よ。(Cf.Bedekar [1968] p.332)
- (30) ある個我 (jīvāḥ) は、何億という創造と帰滅の間³¹ 静止し、そして他 (の個我) は動く³²。生き物の発生の範囲は³³、何千という池 (に匹敵するほど大きい) である、ダイトヤよ³⁴。(Cf.Hopkins [1903] p.45, parallels illustrative of the periods)
- (31) また、その池はすべて、一ヨーjanaの幅と、深さとしては一クローシャの深さがあり、それぞれ幅五百³⁵ヨーjanaの大きさである。(Cf.Hopkins [1903] pp.45-46, parallels illustrative of the periods)
- (32) 毛の先端で³⁶、池から水を一日一回投げ捨て、二度は捨てないでしょう。(このよう

²⁶P.D.: viṣṇuś ca K. rudraś ca

²⁷te N. te ṛvijāḥ / (「これら」とは、祭官たちである) N. の解釈は、d 句の saṃvidanti の主語を考慮したものとされる。

²⁸P.,D.: vadaty ayam K. vadanty api N. ayam iti buddhistha āmnāyaḥ parāmr̥śyate / sa ca 'ekam santam bahudhā kalpanti / yo devānāṃ nāmadhā eka eva' ityādi / (「その唯一存在するものを人々は多様に構想する。神々に名前を与える者は単一である」などによって、「これ (ayam)」とは、意識のうちにある聖典であると考えられる)

²⁹P. jñānena D.,K.: vijñānāt

³⁰P.,K.: sattvaṃ D. brahma

³¹saṃhāravikṣepasahasrakotiś Cn. saṃhāravikṣepasabdābhyāṃ jagallayodayakālah kalpasamjñaka ucyate / (「創造と帰滅」という言葉によって、劫という名の、世界の消滅と生成の時間が言及されている) Cs. saṃhāro maraṇam, vikṣepo janma / (「帰滅」とは死であり、「創造」とは誕生である) Cv. saṃhāre sati vikṣepaḥ svodarānikṣepaḥ / (「創造」とは、「帰滅」している時に、自分の腹に置くことである)

³²pracaranti Cv. pracaranti, prakṣṭhakarmāny ācaranti / (「動く」とは、多くの行為を行うことである)

³³pārimānyam Cn.,Cp.: pārimānyam, svārthe taddhitaḥ (Pāṇini 5.1.124) / (taddhita 接尾辞 ya は語本来の意味において用いられている)

³⁴この章の第 30~57 詩節、および第 63,69 詩節の韻律は Upajāti が用いられている。ただし第 31 詩節のみ Indravajrā である。

³⁵pañcaśatāś ca Cn. pañcaśatāḥ iti līngavyatyaya ārṣaḥ / ((中性形をとらないという) 名詞の性の相違は、古形である)

³⁶vālakotyā Cv. vālakotyā, śiṃśumāradevasya vālāgreṇa jalam kṣipyate / śiṃśumāravālakotyā jyotiścakrasya paunaḥpunyenāvartane sati svavīhitāyuso 'vasāne tato 'nyatrāpi gacchati / yathā vāpījalasthaśiṃśumāreṇa tajjalam kasmiṃścit kāle uccaladvālakotyāḥ anyatra kṣipyate tadvat / (「毛の先端で」とは、イルカの神の毛の先端によつ

にしてこれらの)池が消滅した時、生き物の創造と帰滅が一回行なわれた³⁷と知るべし。(Cf.Hopkins [1903] p.46, parallels illustrative of the periods)

(33) 最高の権威 (pramāṇa) によれば、靈魂の色は六種である³⁸。黒、灰色、青—青はその(黒と灰色の)中間である (athāsya madhyam, cf.Bedekar [1968] p.332, fn.2)—、そして赤は、(これらより)耐えやすく、黄色は安楽であり、白は極めて安楽である。(Cf.Hopkins [Great Epic] p.179, the Colors of the Soul; Bedekar [1968] p.332)

(34) 靈魂は、汚れなく愁いなく疲労なき最高の白色を成就すると、力あるダーナヴァよ、何千となく母胎での誕生におもむいて後、成就に至るのである、ダイティヤよ。(Cf.Bedekar [1968] p.332)

(35) 神は、その道を教義 (darśana 見) と言った。(道に)到達した後は、清浄な教義³⁹と言った⁴⁰。道は生き物の色によって作られ、そして色は時 (kāla) によって作られるのである、すぐれた悪魔よ⁴¹。(Cf.Bedekar [1968] p.333)

(36) この世には十四の十万倍、靈魂の性質の⁴²上昇の道がある、ダイティヤよ。それ(靈魂の性質)によって、上昇が⁴³行なわれると知るべし。そして、それら靈魂の維持と降下とを⁴⁴同様に(知るべし)。(Cf. Hopkins [1903] p.45, periods of wandering of jīva)

(37) 黒い色(の靈魂)には低劣な道がある。彼は地獄で焼かれつつ沈む⁴⁵。そして、非常に多くの生き物として誕生する間、彼の場所は悪しき道とともにあると、(人々は)語る⁴⁶。(Cf.Bedekar [1968] p.333)

(38) それから十万年住んで、その後灰色⁴⁷に達する。彼は、そこに、願望をもつことで水が投げられることである。イルカの毛の先端によって、星座が繰り返して回転している時、自分に与えられた寿命は存在し、(寿命が)終ると、そこから別のところに行くのである。池の水にすむイルカが、ある時その水を、立っている毛の先端によって別のところに投げるのと同じように)

³⁷P. kṛtaṃ D.,K.: paraṃ

³⁸ṣaḍjīva-varṇāḥ Cv. ṣaḍjīva-varṇāḥ iṣattāmāsa - atitāmāsa - iṣadrājasa - atirājasa - iṣatsātvika - atisātvikabhedena / (ややタマスの、過度にタマスの、ややラジャスの、過度にラジャスの、ややサットヴァ的、過度にサットヴァ的の相違による)

³⁹śubhaṃ darśanam Cv. śubhaṃdarśanam, vaiṣṇavasiddhāntam / (「清浄な教義」とは、ヴィシュヌ派の教説である)

⁴⁰P. cāha D.,K.: cāpi P. には āha が a 句と b 句に 2 回用いられている。

⁴¹Deussen は, Chāndogya Up.8.7-12 の参照を示唆し, Nīlakaṇṭha の Ait.Up. に関連づけた解釈を紹介している。

⁴²P.,D.: jīva-guṇasya K. jīva-guṇasya

⁴³ārohadṇaṃ Cs. ārohaṇaṃ, pūrvasmād dhāridravaṇāt śuklavarnaprāptiḥ / (「上昇」とは、前段階の黄色から白色への到達である)

⁴⁴sthānaṃ tathā niḥsaraṇaṃ Cp. yena kramenārohaṇaṃ sthānaṃ ca, tatkrameva teṣāṃ niḥsaraṇam / (上昇と維持の順序と同じ順序によってそれらの降下もある)

⁴⁵P.,K.: majjate D. sajate

⁴⁶K. はこの詩節の前に次の詩節を挿入している。

yo 'smād atha bhraṣyati kālayogāt kṛṣṇe varṇe tiṣṭhati sarvakṛṣṭe /
atiprasakto nirayāc ca daitya tatas tataḥ saṃparivartate ca //

⁴⁷varṇaṃ haritaṃ N. haritaṃ dhūmraṃ tiryagyonitvaṃ / (「harita」とは、灰色であり、動物の母胎である) Deussen: die fahle [harita-dhūmra, Nil] Farbe Gānguli: the colour called Tawny.

- なく住む。(住むべき) 期間 (yuga) が尽きた時、彼の本性は、暗闇に覆われている⁴⁸。
(Cf. Bedekar [1968] p.333)
- (39) サットヴァの性質と結びつき、自らの認識 (buddhi) によって暗闇を排除しつつ努める (ghaṭate) 時、青くなった⁴⁹その靈魂は赤色に近づき、人間の世界において活動する。(Cf. Bedekar [1968] p.333)
- (40) そこで、彼は創造と帰滅の間⁵⁰、自分の行為によって生じた⁵¹束縛に苦しみつつ(活動する?)。それから彼は、百回の帰滅と創造が過ぎた時に⁵²、黄色に近づく。(Cf. Bedekar [1968] p.333)
- (41) 黄色の色をもつ者は、千回の生き物の創造の間、活動しつつ存在する。彼は解脱していないので、それから一万回のさらなる(生き物の創造の間)、地獄に存在するのである、ダイティヤよ。
- (42) そして彼には、帰滅によって生じた⁵³五千と四千の道が (gatīh) 存在する。そして(その後)、彼は、他のどの誕生においても、地獄からは⁵⁴解放されていると知るべし。
- (43) 彼は、何度も神の世界で時を過ごし、そしてそこから落ちて人間に至る。八百回の創造と帰滅の間、人間の中で存在し、不死性に赴くのである。(Cf. Hopkins [1903] p.45, periods of wandering of jīva)
- (44) 彼は、運命によって (kālayogāt), この世界から落ちて、黒いもつとも悪しき (sarvakaṣṭe) 底に住む。どのようにしてこの靈魂の世界 (jīvaloka) は (解脱を) 成就するのか、このことを汝に語るであろう、悪魔の英雄よ。(Cf. Bedekar [1968] p.333)
- (45) 彼は、七百の神の姿の間に、赤、黄そして白色となる。この白色に至って、彼は、もつとも称賛されるべき他の八種の世界に至る。(Cf. Bedekar [1968] p.334)
- (46) 八(つの世界)と六十と何百(という姿(?))は、大きな光輝を持つ者の心にとっては

⁴⁸P.,K.: tamasā saṃvṛtātmā D. tapasā saṃvṛtātmā

⁴⁹P. nīlo D.,K.: nīlān N. sattvāpakarṣe tu nīlāt nīlatvaṃ prāpya manuṣyaloke parivartate / (サットヴァが減少した場合には、青色から (?) 青色性を得て、人間の世界で活動する)

⁵⁰P. saṃhāraṇisargam eva D.,K.: saṃhāraṇisargam ekam

⁵¹P.,K.: svakarmajaiḥ D. svadharmajaiḥ

⁵²vyāṭite Cn. vyāṭite, vyatigacchati, karmavyatihāre taṅ (Pāṇini 1.3.14) / gatikāntyarthasya “vī”dhātoḥ antahpraśliṣṭasya “ī” dhātor vyatipūrvasyedaṃ rūpam (cf. Kaumudī on Pāṇini 1.3.14) / (「vyāṭite」とは、過ぎ去る、という (parasmaipada) の) 意味であるが、行為の相互性において (ātmanepada) を意味する) taṅ 接尾辞が用いられている。この語形は、進行と願望を意味する vī-語幹と内部で融合した、ī-語幹が vyati を前半部としている)

⁵³saṃvartakṛtāni Cn. saṃvartakṛtāni, kalpe kalpe kṛtāni / (「帰滅によって生じた」とは、劫ごとに為された、という意味である) Cs. saṃvartakṛtāni / saṃvartah pralayaḥ, kṛtaṃ sṛṣṭiḥ / jananamaraṇānīty arthaḥ / (「saṃvarta」とは帰滅、「kṛta」とは創造である。すなわち誕生と死という意味である) Cv. saṃvartakṛtāni, mahāpralayaḥ / (「saṃvarta」とは「帰滅によって生じた」とは、大帰滅において為されたという意味である)

⁵⁴nirayāc ca Cp. nirayāt, pāpāt / (「地獄から」とは、罪からという意味である)

妨げとなる(?)⁵⁵。白色の最高の道では、(醒めている状態、夢、熟睡の)三種は⁵⁶停止しているのである、大きな威厳をもつ者よ。

- (47) 彼は、望みをもつことなく⁵⁷、望まぬ帰滅と創造を一回、そしてさらに四回(の帰滅と創造の期間を)過ごす。第六の色(白色)の最高の道は、疲労なき卓越した者によって成就される⁵⁸。(Cf. Bedekar [1968] p.334)
- (48) 彼は、百回の帰滅と創造の期間、残余期間と共に、望みなく、七(つの世界)よりも上方で(?)⁵⁹それら(の世界)に⁶⁰住むのである⁶¹。(彼は、)そこから人間の世界に戻って、それ以後、偉大な人間となる。
- (49) 彼は、そこから戻って、それから順序に従い、最初に(より高い?)生き物の誕生に達する。そして帰滅と創造によって作られた旅をする⁶²彼は、もろもろの世界を七回廻るのである。
- (50) 彼は、七回の帰滅を障害と考えて⁶³、成就者の世界に⁶⁴至り、そこから神の、ヴィシュヌの、そしてブラフマンの、そしてシェーシャの⁶⁵、ナラの、神の、最高のヴィシュヌ神の、不動にして無限の境地に至るのである。

(51) 帰滅の時に、身体を焼かれた⁶⁶人々は (prajaa) 常にブラフマンに至る。活動を本性

⁵⁵ aṣṭau ca ṣaṣṭiṃ ca śatāni yāni manoviruddhāni Cp. manoviruddhāni, manasaḥ kṣobhakāni / (心を動揺させるもの、という意味である) Deussen: die acht [Welten] der Glanzreichen und die [mit ihnen identischen] sechzig Hunderte [von psychischen Zuständen, dreissig für das Wachen, dreissig für den Traum, von Nīl. sehr willkürlich zusammengebracht] sind auf das Manas beschränkt; Ganguli: Know that the Eight (already referred to and) which are identical with the Sixty (subdivided into) hundreds, are, unto those that are highly effulgent, only creations of the mind (without having any real independent existence). Hopkins [Great Epic] p.165: The eight (worlds) and the sixty and the hundreds (of vyūhas) are impediments to the mind of the illuminee.

⁵⁶ trīny eva ruddhāni N. trīṇi jāgrasvapnuṣuptyākhyāni / (「三種」とは、覚醒、夢、熟睡のことである)

⁵⁷ anīśaḥ Cn. anīśaḥ, yogaiśvāryopasthāpitān divyān bhogaṃś tyaktum asamarthaḥ / (「望みをもつことなく」とは、ヨーガの自在力によって生じた天の享受を捨てることができない、ということである)

⁵⁸ P. siddhā viśiṣṭasya gataklamasya D.,K.: siddhāv asiddhasya gataklamasya Cn. siddhāvasiddhasya, śudhābrahmasākṣātkāreṇa jīvanmuktatām aprāptasya / (「成就に至っていない者」とは、清浄なブラフマンを直観することによって生前解脱に到達していない者のことである)

⁵⁹ saptottaram Cv. saptottaram, saptapātālokebhya uttaram / (「saptottara」とは、七つのパーターラ世界より上方に、という意味である) N. sapta puurvoktaani śrotraadipaṅcakam manobuddhii ca taani uttaraaṇi sattvokarṣabalena utkṛṣṭaani yasmin / (七種とは既に述べた耳などの五種と心と認識である。サットヴァの優勢な力によって卓越した、それらすぐれたもの、そこにおいて、という意味である)

⁶⁰ P. teṣu D.,K.: tatra

⁶¹ K. はこの後に、以下の句 (=P.47a) を挿入している。

samhāravikṣepam aṣṭam ekaṃ catvāri cānyāni vasaty anīśaḥ

⁶² P.,K.: samhāravikṣepakṛtapravāsaḥ D. -prabhāvaḥ

⁶³ samhāram upaplavāni sambhāvya Cn. samhāram ṇamulantam / sapta bhūrādisatyalokāntāḥ lokān, manobudhisahitāni jñānendriyāni vā samḥṛtyaiva, bodhena bādhitvā / (samhāram は、kṛt 接尾辞 am を末尾にもつ Gerund である。「七」は、大地を始めとし真実の世界を終りとする世界である。その世界をマナスとブッディを伴う知識器官によって振り捨てて (samḥṛtya), すなわち英知によって除いて、という意味である) Cs. upaplavāni, maraṇāni / samhāram yāvatkalpaṃ / (「障害」とは死である。「帰滅」とは、一劫の期間である) Cs. sambhāvya, anubhūya / (「考えて」とは、経験して、の意味である)

⁶⁴ P. siddhaloke D.,K.: jīvaloke

⁶⁵ śeṣasya Ca. śeṣasya, samkarṣaṇākhyasya / (「シェーシャ」とは、サンカルシャナと呼ばれるものである)

⁶⁶ paridagdhakāyā Ca. paridagdhakāyā, kṣiṇabhautikalingaikadehāḥ / (「身体を焼かれた」とは、元素の形象 (līṅga) の滅した一つの身体をもつ、ということである)

とする神々のあらゆる集団 (N. 感官), そしてブラフマンの世界からの不死の者も⁶⁷(ブラフマンに至る)。

- (52) 生き物の創造の時, 残余の時をもつ⁶⁸個我は (jīvāḥ) 自らの場所に至る。あらゆる不幸によって⁶⁹残余の時がなくなった者のうち⁷⁰, (神々に) 匹敵する人間は, (劫の) 終りには, その (神々の) 境地に至るのである。
- (53) しかし, 成就者の世界から逸脱していく者は, 順次それ (逸脱する原因) に応じて彼らの道を行く。逆に, すぐれた人々 (jīvāḥ pare), そして, その (すぐれた人々の) 力を衣服とする姿の者たちは⁷¹, 自身の運命に⁷²赴くのである。
- (54) 彼が⁷³残余 (の期間) を享受する時, 生き物と二柱の白い女神が (?)⁷⁴(彼の中に) 存在する限りは, 五感の本性 (?pañcendriyarūpa) を統御するならば, その者には⁷⁵清浄な心がある。(Cf.Bedekar [1968] p.334)
- (55) 彼は, 常に清浄な心 (manas) で思考しつつ, かの最高の清浄な道に行く。そこから⁷⁶, 不動の境地に近づき, 到達しがたい永遠のブラフマンに至るのである。以上, このように, ここにナーラーヤナ神の力を私は汝に語った, 欠点なき者よ。(Cf.Bedekar [1968] p.334)

ヴリトラは言った。

- (56) そのように理解されたならば, 私にはいかなる愁いもない。汝の言葉をその通り正しいと見るであろう。汝の言葉を聞いて, 高貴な方よ, 今や私は汚れなく, 罪も離れている。(Cf.Bedekar [1968] p.334)
- (57) このように, 尊者よ, 偉大な聖仙よ, 偉大な威光ある者の無限の力ある輪 (cakra) は活動している。あらゆる創造が生じるところが, 無限のヴィシュヌ神の永遠の場所である。彼こそは偉大な最高のプルンシャであり, この一切の世界は彼を基盤としている。

ビーシュマは言った。

⁶⁷P. brahmalokād amarāḥ D. brahmalokād aparāḥ K. brahmaloke hy amarāḥ
⁶⁸P. prajāvisargaṃ tu saśeṣakālaṃ D.,K.: prajāvisargaṃ tu saśeṣakāle Cp. prajāvisargaṃ prāpya saśeṣakālaṃ, saśeṣāḥ, karmaśeṣara[s]a[hitāḥ] / vibhaktilopaḥ chāndasaḥ / (「残余がある」人々とは, 行為の残余をもつ人々のことである。活用語尾の消失はヴェーダ語形のためである (?)) Cv. saśeṣakālāḥ, saṃsārānubhāvakālaśeṣasaḥ / (「残余がある」人々とは, 輪廻を体験する時間の残余をもつ人々のことである)
⁶⁹P. sarvāpadā ye D.,K.: sarve devā ye
⁷⁰P. niḥśeṣānām D.,K.: niḥśeṣatas
⁷¹P.,K.: tadbalaṣeṣarupā D. tadbalatulyarupā
⁷²P. vidhiṃ svakaṃ D. svaṃ svaṃ vidhiṃ K. svakaṃ vidhiṃ
⁷³sa Ca. saḥ, siddhalokapracyutirāhityākhyaviśeṣabhāvo, vaiśiṣṭyapṛāptir yāvad asti / (「彼が」とは, 成就者の世界を逸脱することのないと呼ばれるすぐれた心をもった者の意味であり, 卓越性への到達は存在するということである)
⁷⁴prajāś ca devyau ca tathaiva śukle N. prajāḥ sarvaāḥ te śukle devau paraaparavidye ca vartete iti śeṣāḥ / (「生き物」とは一切の生き物, 「二柱の白い女神」とは高次と低次の学問である)
⁷⁵P. tāvat tadā teṣu D.,K.: tāvat tadanṅeṣu D.,K. は a 句に単数形 sa が用いられているのを考慮したものか。
⁷⁶tataḥ Cp. tataḥ jñānasamanantaram eva / (「そこから」とは, 知識を得たすぐ後で, のことである)

- (58) このように言って、クンティの子よ、かのヴリトラは氣息を捨てた。そして自己を(ブラフマンに)集中して (yojayitvā), 最高の境地に達した。(Cf.Bedekar [1968] p.334)

ユディシュティラは言った。

- (59) それでは、祖父よ、サナットクマーラがかつてヴリトラに語ったのは、この聖なる神ジャーナルダナ (=クリシュナ) のことですか。

ビーシュマは言った。

- (60) 根本に住し⁷⁷, 大きな熱力をもつ⁷⁸かの聖者は⁷⁹, 自分の無限の光輝によって⁸⁰, そこにいたままで (tatsthaḥ), これらの種々の姿をした存在を⁸¹創造した。
- (61) 彼の四分の一の半分によって⁸²(なるもの), これを不動のケーシャヴァと知るべし⁸³。(別の) 四分の一の半分によって, この英知ある者 (ケーシャバ) は三つの世界を創造した。(Cf.Hopkins, Epic Mythology, p.215.52, Hopkins [1902] p.132)
- (62) 後に存在することになった (arvāksthitas), 不変の者 (ケーシャバ) は, 劫の終りには変化する。(一方) この力強く威光ある至尊者は, (劫の終りには) 水中に横たわり, そして寂靜を本性とする創造者として, この永遠の世界をめぐるのである。(Cf.Hopkins [Great epic] p.189, fn.1 (クリシュナによる救済); Hopkins [1903] p.24 (kalpānte parivartate))
- (63) 無限者は一切を充填し⁸⁴, サナトクマーラとして⁸⁵もろもろの世界をめぐる。そしてこの偉大な存在は, 妨げられることなく, 彼の中にある (tatstham) この多様な一切の世界を創造するのである。

ユディシュティラは言った。

- (64) 最高の目的を知る者よ, ヴリトラは自分の道を見出した, と私は思う。それゆえ, 彼は光輝によって⁸⁶喜び, 悲しむことはないのである, 祖父よ。(Cf.Bedekar [1968] p.334)

⁷⁷ mūlasthāyī Ca. mūlasthāyī, sarvapradhānabhūtaḥ īśvaraḥ / (「根本に住し」とは, すべての第一原因に存在する自在者を意味している) Cp. mūlasthāyī vyūharūpaḥ / (「根本に住し」とは, 顕現の姿である)

⁷⁸ P. mahātapāḥ D.,K.: mahāmanāḥ

⁷⁹ P.,K.: sa bhagavān D. mahādevo

⁸⁰ P.,K.: svenānantena tejasā D. bhagavān svena tejasā

⁸¹ P.,D.: bhāvān nānārūpān K. bhāvān ātmarūpān

⁸² turīyārdhena Cn.,Ca.: turīyārdhena, aṣṭamahāgena (「四分の一の半分によって」とは, 八番目の部分によって, の意味である)(Cn. aṣṭamaṣṭena) / Cp. ardhapadam aṣṭaparam / turīyāṣṭena / (「半分」は部分を意味し, 四分の一によって, の意味である。) Cs. turīyāṣṭena, viśvataijasaprājñākhyam avasthātrayam apekṣya turīyabrahmarūpeṇa / yad vā aniruddhāṣṭenety arthaḥ / (「四分の一の半分によって」とは, 一切の, 光よりなる, 英知のと呼ばれる三種の状態に関連して, 第四のブラフマンの姿によって, という意味である。あるいは, アニルッダの部分によって, ということである)

⁸³ K. はこの後に次の句を挿入している。

turīyāṣṭena brahmāṇaṃ tasya vidhī mahātmanah /

⁸⁴ sarvāṇy aśūnyāni karoti Cp. aśūnyāni, putrapautradīdvārā pūṃāni / (「充填し」とは, 息子や孫などによって満たされている, ということである)

⁸⁵ P. sanat Kumārah D.,K.: sanātanaḥ

⁸⁶ P.,D.: śubhā K. sukhāt

- (65) 白色の家系に生まれた白色の者は、完成者であり、(この世界に) 戻ることはない、罪なき者よ。彼は、動物の道からも、地獄からも解放されているのである、祖父よ。
(Cf.Bedekar [1968] p.334)
- (66) しかし、黄色あるいは赤色において存在する者は、王よ、暗闇の (tāmasair) 行為に覆われて、動物界のみを見るであろう。
- (67) 我々はしかし、ひどく苦しみ⁸⁷、不快な汚れた顔に染まっている⁸⁸。いかなる道を我々は獲得するのであろう。青 (い道か)、あるいは最も下の黒 (い道) か⁸⁹。(Cf.Bedekar [1968] p.334)

ビーシュマは言った。

- (68) 清浄な一族をもち、誓約を重んじるパーングヴァ族は、神々の世界において時を過ごした後、再び人間になるであろう。
- (69) 神々の間で⁹⁰安楽を享受した後、時至れば、幸運にも生き物の創造に出会い、幸運にも成就者の数に入るであろう。汝ら恐れることなかれ。あらゆる汚れを離れてあるべし⁹¹。(Cf.Bedekar [1968] p.334)

[272 章] (D.281 章, C.10098-10142, K.287 章)

ユディシュティラは言った。

- (1) おお、無量の光輝あるヴリトラはもっともダルマにかなっている、父よ。彼の認識は匹敵するものなく、ヴィシュヌ神に対する信愛も同様に (匹敵するものがない)。
- (2) 無量の光輝あるヴィシュヌ神のこの足跡は認識するのが難しい。どうして、王中の虎よ、彼はその足跡を⁹²知ったのか、父よ。
- (3) あなたが語ったことを、私は信頼しよう、不動の者よ。しかしさらに私には、理解の不明確さのために⁹³(知りたいという) 意欲 (buddhi) が生じた。
- (4) 最もダルマにかなない、ヴィシュヌを信愛し、(ヴェーダの) 語の結合における (padānvaye) 真理を知るヴリトラは、どうしてインドラによって打ち負かされたのか、バラタ族の雄牛よ。

⁸⁷āpannā Cp. āpannāḥ, āpadgrastāḥ / (「苦しみ」とは、不幸に見舞われているということである)

⁸⁸P. raktāḥ kaṣṭamukhe 'sukhe D. raktā duḥkhasukhe 'sukhe K. kaṣṭāḥ sukhe 'sukhe

⁸⁹kṛṣṇādhamām atha Cn. (reading kṛṣṇām atha adhamām) kṛṣṇayā sahitām adhamām kṛṣṇādhamām / (「最も下の黒」とは、黒色を伴った最も低いことである)

⁹⁰P.,D.: deveṣu K. anyadeheṣu

⁹¹P.,D.: mā vo bhayaṃ bhūd vimalāḥ stha sarve K. mā vo bhayaṃ bhavatu na vo 'stu pāpam

⁹²P. padaṃ taj D.,K.: padaṃ tu

⁹³P.,D.: avyaktadarśanāt K. avyktadarśanā

- (5) このように疑問を尋ねる私に語るべし、バラタ族の雄牛よ。いったいヴリトラは、王中の虎よ、どのようにしてインドラによって征服されたのか、を。
- (6) 戦いはどのようなであったのか、それを詳細に語るべし、祖父よ、長い腕をもつ者よ。私の関心は最高に(達している)から。

ビーシュマは言った。

- (7) かつてインドラは、神々の群と共に、車に乗って出かけた (prayāta)。すると前方にヴリトラが山のように立っているのを⁹⁴見た。
- (8) 五百ヨージャナの高さ、敵を調伏する者よ、周囲は (vistareṇa) 三百ヨージャナを超えた(山のごとく)。(Cf.Hopkins[1902] p.153. exceptional usage of accusative to name the dimension of a thing)
- (9) ヴリトラの、そのような三界の者(すべて)によっても打ち勝ちがたいその姿を見て、神々は恐ろしくなって、冷静さを保てなかった。
- (10) 一方、王よ、インドラはといえば、その時その卓越した姿を見て、ヴリトラに対する恐れから、突然足がすくんだのである⁹⁵。
- (11) そして、すべての神々と悪魔との戦いが近づくと⁹⁶、大音声と楽器の音が⁹⁷生じた。
- (12) しかし、クル族の子孫よ、近づくインドラを見て、ヴリトラには狼狽も恐れもなく、またいかなる懸念も⁹⁸生じなかった。
- (13) それから、神の主たるインドラと偉大なヴリトラとの、三界を恐れさせる闘いが生じた。
- (14) 剣、三叉槍⁹⁹、槍、刀・矛・棍棒、種々の石、大音声の弓が、
- (15) 天の種々の武器が、火と松明が、それから、神と悪魔の軍勢が、全世界に満ちた。(Cf.C.V.Vaidya, Epic India, 1907, pp.248-253 武器の記述)
- (16) そして父祖を先頭にしてあらゆる神々の群、そして、大幸運をもつ聖仙たちが、その戦いを見るためにやってきた。

⁹⁴P. viṣṭhitam D.,K.: dhiṣṭhitam

⁹⁵ūrstambho Ganguli: struck with palsy in the lower extremities; Deussen: schlotterten die Knie; 中村[1998]: ひざがにわかにかがくがく震えた

⁹⁶P. tasmin yuddha upasthite D.,K.: tasmin yuddhe hy upasthite D.,K. は hiatus breaker を挿入していると考えられる。

⁹⁷P. nisvanaḥ D.,K.: niḥsvanaḥ

⁹⁸āsthā Ca. āsthā, dṛḍhaḥ pratyaḥ jetum asakyo 'yam iti / (「懸念」とは、勝つことはできないという恐れる観念である)

⁹⁹P.,D.: pattīśaiḥ K. pattasaiḥ

- (17) 偉大な王よ、最上の天上の車に乗ってシッダが、バラタ族の雄牛よ、そして、アブサラスと共に最上の天上の車に乗って、ガンダルヴァも、集まって来た。
- (18) するとダルマを保持する者たちの中ですぐれた者であるヴリトラは、石の雨で中空を充滿して、山から (?)¹⁰⁰(石の雨を) 神々の王(インドラ)に降り注いだ。
- (19) すると神々の群は、非常に怒って、矢の雨によって¹⁰¹、戦闘においてヴリトラが投げた石の雨を排除した。
- (20) クル族の虎よ、大幻術をもつ大力のヴリトラは、幻術の戦いによって、神の王(インドラ)をあらゆる面で悩ませた。
- (21) インドラは、ヴリトラに苦しめられて意識を失った (moha)。そのとき、ヴァシシュタ仙は、ラタンタラの祭文によって彼を目覚めさせた。(rathantara sāman; cf. A.B.Keith, *The Religion and Philosophy of the Veda and Upanishads*, pp.253, 335, 350,351, 461,486.)

ヴァシシュタ仙は言った。

- (22) あなたは神の中で最もすぐれた者である、神の中の主よ、神の敵を粉碎する者よ¹⁰²。三界の力をすべて備えたあなたが、何故力衰えたのか。
- (23) ここにいるのはブラフマー神である。ヴィシュヌ神である。世界の支配者シヴァ神である。ソーマ神である。至尊の神である。そしてあらゆる最高の聖仙である¹⁰³。
- (24) 誰か他の者ならばするように、インドラよ、絶望してはならない。闘いにおける聖なる決心をして、敵を殺すべし、神の支配者よ。
- (25) こちらは、あらゆる世人によって敬われている三つ眼の世間師である。(この)至尊者が汝を見ている。惑乱を去るべし、神の支配者よ。
- (26) こちらは、ブリハस्पティを先頭にした梵仙たちである、インドラよ。彼らは神聖な讃歌によって、勝利のためにあなたを讃えている。

ビーシュマは言った。

- (27) このように偉大なヴァシシュタ仙によって眼を覚まされて、最高の光輝をもつインドラには、非常な力が生じた。

¹⁰⁰P. parvatāt samavākīrat D. samākīrad drutam K. sarvataḥ samavākīrat 山のごときヴリトラが、山頂から降り注ぐがごとく、という意味か。

¹⁰¹P. śāstravr̥ṣṭibhiḥ D.,K.: śaravr̥ṣṭibhiḥ śāstra よりも śara の方が意味がより明瞭に限定されている。

¹⁰²P. surārivinibarhaṇa D.,K.: daityāsuranibarhaṇa

¹⁰³K. はこのあとに以下の句を挿入している。

samudvignaṃ samīkṣya tvāṃ svastīty ūcur jayāya te /

- (28) そして、パーカの処罰者である至尊者は、意識を取り戻し、偉大なヨーガに専心して、彼の幻術 (māyā) をとり除いた。
- (29) それから、幸運あるアングラスの息子、そして最高の聖仙たちは¹⁰⁴、ヴリトラの勇猛さを見て、大自在者 (シヴァ神) に近づいて、世間の幸福を望んで、ヴリトラの消滅を目的として話をした。
- (30) すると至尊なる世界の主の光輝は熱病 (jvara) となって、すぐれたダイトヤである¹⁰⁵恐ろしいヴリトラに¹⁰⁶入りこんだ。
- (31) 一方、あらゆる世界で敬われる至尊の神ヴィシュヌは、世界の保護に専念して、インドラのもつ金剛杵に入り込んだ。
- (32) すると、賢明なるブリハस्पティは、インドラに近づいて、また、偉大な光輝をもつヴァシシュタ仙、そしてあらゆる最高の聖仙たち、
- (33) 彼らも、恩寵を与え、世界で敬われているインドラに近づいて、心を一つにして (ekāgramanaso)、「ヴリトラを殺すべし」と言った、力ある者よ。

大自在者は言った。

- (34) インドラよ、この偉大なヴリトラは、大力によって覆われ、一切を本性とし、どこへでも至り、多くの幻術をもつことがよく知られている。
- (35) それ故 (tad), このすぐれた悪魔は、三界によっても勝つのが難しい。汝は、ヨーガを用いて殺すべし。見下してはならない、神の支配者よ。
- (36) このヴリトラは、力のために、六万年間苦行を行い、神の主よ、ブラフマー神は彼に恩寵を与えたのである。
- (37) (その恩寵とは) ヨーガ行者の偉大さ、偉大な幻術をもつこと、大力をもつこと、そして最高の精力 (tejas) である、神の自在者よ。
- (38) 「かくして、私の精力 (tejas) は (汝に) 入ったのである、インドラよ。汝もまた同様になったので、このダーナヴァ族のヴリトラを、金剛杵によって殺すべし¹⁰⁷。

シャクラは言った。

- (39) 至尊者よ、あなたの恩寵によって、近づくのが極めて困難なディティの子を、汝の
見ているところで、金剛杵を用いて殺すであろう、神の雄牛よ。

¹⁰⁴P. paramarṣayaḥ D.K.: sumaharṣayaḥ

¹⁰⁵P. daityavarāṇ D.K.: lokapatīm

¹⁰⁶P. mahāraudraṇ vṛtraṇ D. tadā raudro vṛtraṇ K. tadā raudraṇ vṛtraṇ

¹⁰⁷P. vṛtraṇ enaṇ tvam apy evaṇ jahi vajreṇa dānavam D. vyagram enaṇ tvam apy enaṇ vajreṇa jahi dānavam
K. vṛtraṇ evaṇ tv avadhyaṇ taṇ vajreṇa jahi dānavam

ビーシュマは言った。

- (40) 偉大な悪魔，ダイトヤに熱病が入った時，神々と聖仙に喜びのために大歓声が起こった。
- (41) そして，太鼓，大音響のほら貝，鼓，小太鼓が¹⁰⁸千回も鳴った。
- (42) あらゆる悪魔には，意識の大喪失が生じた¹⁰⁹。そして強度の知恵の消滅が¹¹⁰一瞬にして生じた。
- (43) 熱病が(悪魔ヴリトラに)入ったのを¹¹¹知って，聖仙と神々は，支配神インドラを讃え，(戦うよう)鼓舞した。
- (44) というのは，闘いの最中，聖仙たちによって称賛されつつ，戦車に乗っていた偉大なインドラの姿は，まことに見るに耐えない(?*sudurḍṣam*)ものであったからである。

[273 章] (D.282 章, C.10143-10207, K.288 章)

ビーシュマは言った。

- (1) 偉大な王よ，全身に熱病に入り込まれたヴリトラの身体に生じた症状(*liṅga*)を，私から聞くべし。
- (2) 口には炎が燃えた(*jvalita*)恐ろしい姿をし，(顔は)ひどく青ざめた。手足はひどく震え，ひどい喘鳴が生じた。髪は激しく逆立ち，著しい呼吸困難も生じた，王よ。
- (3) そして不吉な(*aśiva*)外見の，残忍な恐ろしいジャッカル(*śivā*)が彼の口から飛び出した。それは彼の想念である¹¹²，バーラタ族よ。そして，燃えて輝く流星が彼の近くに現れた。(Cf.Hopkins, *Epic Mythology*, p.129.50)
- (4) はげ鷲，青鷲の群(?*vaḍā*)は¹¹³，恐ろしい声を発し，歓喜して¹¹⁴ヴリトラの頭上を，円盤のように廻った。
- (5) それからインドラは，闘いのために神々によって増強された¹¹⁵その戦車に立ち，金剛杵を持ち上げて，かのダイトヤを見つめた。
- (6) その偉大な悪魔は，人間には出せない(*amānuṣam*)叫び声を発した。そしてひどい熱病にとりつかれた彼は，すぐれた王よ，あくびをした。彼があくびをしている時，インドラは，金剛杵を投げた。(この章未完)

¹⁰⁸P. *ḍiṅḍimāś* D.,K.: *ḍiṅḍibhāś*

¹⁰⁹P. *smṛtilopo 'bhavan mahān* D.,K.: *smṛtilopo mahān abhūt* P. と D.K. との相違が imperfect と aorist であるのは，過去を表す両者に対する意識の相違を反映しているか。

¹¹⁰P. *prajñānāśaś ca* D.,K.: *māyānāśaś ca*

¹¹¹P.,K.: *tam āviṣṭam* D. *tathāviṣṭam*

¹¹²P.,D.: *smṛtiḥ tasya sā* K. *smṛtir naṣṭāśya*

¹¹³P. *grḍhrakaṅkavavaḍāś caiva* D.,K.: *grḍhrāḥ kaṅkā balakāś ca* Deussen: Geier, Reiher und Kraniche *Gan-guli: Vultures and kanakas and cranes*

¹¹⁴P.,K.: *saṃhrṣṭāś* D. *saṃsrṣṭāś*

¹¹⁵P. *devāpyāitam* D.,K.: *devāpyāyita(h)*